

# 湖の蓮



友人に無理に連れてこられた美術館。そこで俺は一つの肖像画に見下ろされていた。その絵から目が離せない。奇麗な湖や教会の絵にはそう惹かれなかったが、どうしてもその肖像画から目が離せなかった。

死に瀕した老婆。

額を含めて二メートルを超える、この美術館最大の肖像画であったが、こちらを見つめる老婆の双眸は、凄絶なまでに生々しかった。落ち窪んだ顔、干からびた皮膚。いずれもこの老婆に近づく死を物語っているというのに、眼だけはギラギラとした脂ぎった光を称えて

いる。ノエル・ルドヴィングの自画像。

「今、何か聞こえたような……」

それは誰かの呼び声のような、風に紛れてしまうほどの微かな声。

「これはこれは。これに魅かれるとはこれも縁。だが、これは一人で見たいけない」

「——誰だ、お前？」

知らない声。知らないはずの声に振り向く。そこには先ほどまでは誰もいなかった場所に男が立っていた。

「なに、ただのしがない告解師だよ。そして君にとつて私が何者かなどは何の意味も持たない。この絵を見て魂が揺さぶられたのだろうか？」

今宵、君の世界は一変する。かつての常識は破壊される」

どういうことだ、という問いかけに答える声は無く、男はいなくなっていた。絵は変わらずそこにある。

あれはなんだつたのか。気味の悪い白昼夢と思えばいいのか、何を聞き間違え、見間違えたのか。そう思えるほど、男の気配は気迫だった。

「あれ、おまえこんな絵が好きなの？ 変わってんな」

「お前、今までどこに居たんだよ」

そこにはここに誘った友人が立っていた。こんな非生産的な奴が美

術館に誘ってくるなんて珍しい事もあったものだ。

「悪い悪い。だがこんなのを見つめるほどお前が趣味悪いなんてな。帰るぞ、こんなの見たら気が滅入る」

「わかったよ」

どうやらこいつは一周回っただけで飽きたらしい。勝手な奴だ。

最後に振り返る。そこにあるのはあの絵だけで、あの男はどこにもおらず、遂に暑さで頭がイカれたかと心配になる。

「おい、先にいつちまうぞ」

「はいはい。というかなんでお前こんなところに来たいなんて言ったんだ？ 似合わなさすぎるぞ」

「あー……なんでだろうな」

そう言いながら去っていく友人。それを追いかけて今日はこの美術館を後にする。

「行きましたか、彼は。遂にこの時が来た」

影のような男が言う。その目はあの絵を見ているわけではない。どこか別の場所を見ている。

「ああ、必ずや、君を解き放つてみせると誓う」

異変が起こったのはその夜。不思議な夢を見た。どこか懐かしい花

の咲き乱れる丘の上で、一人の少女が鎖に囚われている。美しい少女だった。彼女は永劫囚われ続けるだろう。恐らくはずっと、そして今も涙を流し続けている。夢というには鮮明で、現実というには影が薄い。

「夢……だよな？」

今のは夢だ。目を覚ますと回りは自分の家で、いつもどおりの日常だ。それなのになぜこんなにも涙が止まらないのか。そして思い出した、昼に美術館で言われた事を。しかし今ではあの男の顔すらも思い出せない。

「なんなんだ……」

降りかかる不可解な現象。それは夢だけではなかった。

『……し、死亡。警察は自殺と断定。昨日一夜での動機不明の自殺者の合計は三十八人です。繰り返します。昨日……』

「え？」

異常な数の自殺者。これが昨日のあの男が言っていた事なのか。そう。まさかとは思っていた。おおよそ美術に興味の無い友人が昨日美術館に行った理由。

——ある噂があった。

曰く、一人でその絵を見ると、見た人間は自殺する。その絵がこ

の町の美術館で公開されると。

「いや……まさかな」

しかし異常はこれだけでは収まらない。その夜、俺は湖に居た。周りには同い年の子供達が居る。皆で笑いながら水遊びをしている。だがおかしい。さつきまではもつと沢山居たような気がする。

その時だった。いきなり、目の前の子供が水に潜り、上がつてこなくなった。それに続くように他の子も沈んで行き、遂には自分一人になった。それでも俺は、また皆だけで遊んでいるらうと名前を呼ぶ。水面に黒い大きな影が映り、次の瞬間水底へと引きずり込まれる。苦しくて、もがいてももがいても水面には届かない。足を引いているのは先ほどの子供達。なぜお前だけが生きているんだと、そう言いたげな目で俺を水底へと引きずり込む。水圧で鼓膜は破れ呼吸器に水が浸入。生存に必要な酸素を使いきり、苦しみの中で俺の意識が断絶する。

「——は、あ……はあ、はあ……」

目を覚ます。まるで数分間息が出来なかったかのように呼吸を繰り返す。夢のはずなのに本当に死んだかのような感覚が鮮明に残っている。

「これが……あの男の言っていた事か？」

君の世界が一変するとは、こういうことなのか？ しかし、その言

葉を授けた男の顔も、声も思い出せない。思い出せる事といったら影のようなものだったということくらい。そのことがこの悪夢よりも不可思議だ。しかし、そんな事も考えられないほどの異常と遭遇する事になる。

そして次の日。その日は教会に居た。火と煙と人々の阿鼻叫喚で覆われた教会に。

俺は必死になって何かを探していた。とても大切なものだった。でも教会の中では見つからなくて、大人達の制止を振り切つて町に出た。町ではさらに死が積み重なっていく。子供も老人も、女も男も関係なく、焼けた肉の匂いが立ち込めている。それでも走る。大切なんだ、あの人は……！

町の外れで、やつと見つけた。大切な彼女を見つけた。彼女は跪いていた。その前には燃えるような赤い髪の男が居る。何か、理解の出来ない言葉を口にしたが、近づいてくる。俺は動けない……そしてその手が動き、鈍器で殴られたような衝撃と共に、刃が振り下ろされ俺の首が転がった。苦痛を感じる暇もなく、ただ身体から血が噴き出し辺りを染め上げていくその光景を、俺は地に転がったまま食い入るように凝視している。鼓動、心臓の脈打ち、もう届かない肉體手を伸ばしたいがそれもできない。

「——はあ、……あ」

泡を食って飛び起きれば、そこは自分の部屋。反射的に首に手をやるが、傷なんてものは一つも無い。

「また……か」

二夜連続の死の悪夢。これは偶然でも何でもなく、あの影のような男の予言の通りだ。事実、この悪夢と死の鮮烈な感覚で精神的に相当参っている。

そして三日目。二日連続の寝不足によって問答無用で眠りに落ちる。落ちた場所はまさしく地獄と呼ぶに相応しい。余りの腐臭に鼻は一瞬で使い物にならなくなった。積み上がった屍は最早生前の面影すら消えうせた髑髏どくろの山。さらに恐ろしいのはそれがそれだけではなかった事だ。

死体と同じように苦しみながらまだ生きているものが居た。髑髏どくろに紛れて、あるいは死病に、あるいは腐れた傷くきに呻きながらそれでも死ぬことができずに這いずり回っていた。

誰かが囁いた。

戦乱の時代。誰もが飢え、傷つき、それでいて楽には死ねない時代。命は強い。血を流しても、身体を患っても、息絶えるまでにはまだ遠

い。死神は隣に居ても、簡単には終われない。

死モリ

「何かを囁いた。

死を想え。  
メメント・モリ

死を想え。  
メメント・モリ

死を想え。  
メメント・モリ

死を想え。  
メメント・モリ

その声だけがこだまする。耳の奥で、鼓膜の中で、頭蓋骨の中で。

何度も何度も——声ならざる声で。

——死ぬ方法はいくつでもある。

その声はぞつとするほど優しかった。

——この指を眼窩にねじ込め。脳髓をかき乱せ。

——舌を噛みきれ。溢れた血で窒息しろ。

——剣を取れ。喉を裂け。

打ち震える。

「あ………」

手が動く。

「あ………あ………」

死は優しい。

死は慈悲深い。

死こそは幸いなり。

死神の誘惑はこうも甘いのか。俺は、いつの間にか手にしていた剣で喉を裂き、屍の山の一部となった。

「——うっ……げえ……」

飛び起きて嘔吐する。吐き気を催す腐臭が夢から醒めても纏わりつく。

「なんで……こんな」

三日連続の死の悪夢。さらには死の感触までもが鮮明だ。なにがどうなっているのか全くわからないが、このままでは壊れてしまう。

「とりあえず水……ないか」

というか冷蔵庫の中は空だった。

「……買って来よう」

コンビニに行く途中、薄暗い路地に入る。ただでさえ陰鬱な気持ちなのに、余計に気持ちが悪くなる。暗い。この三日で自殺者はさらに増えた。友人から聞いた話によると美術館はとうとう展示を取りやめらしい。あの絵の噂が広まり美術館側も展示を自粛した

のだろう。本当にあの絵が原因みたいで気分が悪い。

「はあ……」

ため息をしてさらに陰鬱な気分になっていたところで再びそいつに出会ってしまった。

「これはまた、随分と酷い顔をしておられる。まるで、夢の中で自殺でもしてきたような——」

「——な」

そこには、奴が居た。およそ特徴の無い顔。まるで影のように気配を感じられない男が。

「お前……いったい何なんだ」

「ただの告解師だと名乗ったはずだ。そしてそれは今関係ないことだ。5  
このままでは君は死ぬ」

「——」

「驚くようなことでもないだろう。君は毎日死に続けている。これを続けて死なぬほうが異常。そして君は眠らないで生きていけるほど器用でもない」

「じゃあ……どうすればいいんだよ」

「簡単だ。乗り越えろ。辿りつけ。それは死を超えた先にある」

「それは——」

問いかける声には無言。また音もなくあの男は消えていた。

「死を超えた先……？」

残されたのは謎めいた言葉のみ。

その日の夜。恐らくは最後の舞台へ眠り、落ちる。

たどり着いたのはある広場。

広場の中央を取り囲む群衆のざわめきを感じ取った。辺り一帯を覆い尽くさんばかりの狂騒は、恐怖と嫌悪と愉悦に満ちて、沌と化し荒れている。そして、耳を聳もたする大合唱——

『Je veux le sang, sang, sang, et sang.

Donnons le sang de flamme.

Pour guérir la sécheresse de la flamme.

Je veux le sang, sang, et sang.』

ただ響くりフレイン。最初は意味はわからなかった。だが、まるで波が引くように、周りが熱狂すればするほどに、俺の中から熱が失せていく。同時に、今まで意味が分からなかったこの歌詞の、人々の声の一語一句が聴き取れるようになっていく。

『血、血、血、血が欲しい。

炎に注こう、飲み物を。

炎の渴あせきを癒すため。

欲しいのは、血、血、血』

広場中央への道が開ける。そこには処刑場……磔刑に処された老婆が居た。

熱狂する群衆が口にするのはあの忌まわしきリフレイン。彼らはまるで聖歌のようにそれを歌う。

権力者が、聖職者が、そして名も無き民衆が、炎に焼かれる罪人を見るために。

「信仰を重んじれば恩情を！ 異端には、業火をもつて報いねばならん！ さあ諸君！ 【魔女】へ鉄槌を！」

「鉄槌を！」

役人のような男の声に群衆が答え、広場はますます熱狂に包まれる。しかし老婆の表情には何の感情も見られない。それもそうだ。あれは放つておいてもあと数日も持たない。それをわざわざ火あぶりにして殺す。ただそれだけの事だ。炎に全身を炙られながら、なお老婆の表情には何も見出せない。その仮面の下にどんな激情が渦巻いているのか。どんな感情があれば火に炙られながらもあんな涼しい顔をしていられるのか。

次の瞬間、場の空気は一変する。

群衆の中の一人が、奇声を上げながら炎の中に身を投げた。それを皮切りに、群衆は熱狂し、狂気し、次々と自ら炎の中に飛び込んだ。炎は広場全域に燃え広がり、辺りを死の世界に変える。響く魔

女の笑い声。それは最早狂笑に近く。

「……あ——」

その声を聞いているとなぜだか堪らなく悲しくて、俺は涙を流していた。

これがあの男の言っていた事。俺は死を越えて彼女にたどり着かなければならない。そして自殺の呪を解かなくてはならない。影が言った事を実現するために——

俺は燃え盛る炎に足を踏み入れた。

そこに、老婆が立っていた。

キャンパスを持ち、ひたすら筆を揮<sup>ふる</sup>っていた。目は飛び出し、肌には骨が浮き、吐息は糸のように細くなり。それでもなお筆を叩きつけていた。

描かれているのは死。泣きながら、呪いながら、自分の死の間際に形が無いものを形にしようとしていた。

「待つ——」

その場面は一瞬で、いま俺が居るのは湖の上。初日に見た夢と同じ場所。だが子供達は居ない。俺一人だ。湖を歩き回っても何も無い。

「まずいな。いきなり詰んだ」

これから何をすれば良いのかまったく分からない。

「まったく君は頑なだ。見ろ。この風景を見ろ」

突然の声。その声の主は足元にいた。水面に写るように告解師を名乗る影が居た。

「言っただろう、縁があると。さあ、この景色、見覚えが無いかね？」

「何を……？ こは夢の中しか見たこと無し。あんな……」

「本当かね？ 来た事があるような気がしないかね？ 何か心の中がざわつき始めないかね？」

最早声は耳に入らなかつた。遠くに見える教会の十字架。あの夢の中で居た子供達……。

「なん、だ……」

「ああ、揺らいでいる揺らいでいる。何か思い出さないかね？」

ああ、そうだ。俺は……こは……

「では聞こうか」

影が言う。嘲笑っている。

「君の名は何だ？」

「……Iotus……」

「お見事。自分が何者かもわかっているかな？」

「ああ……約束をした。こは……」

「結構。ならば今はいいだろう。だがまだ全て思い出した、というわけではないようだ」

「ああ。それは自分でもわかつてる。でも予想もつく。あの戦争の前までははつきり思い出せる。なら、約束を果たさなきゃいけない」

「ああ、其処こそが最大の難問。そこに私はおらず、君の宿敵が居る。最後の助言だ。運命などそう簡単に変わらんよ」

一瞬で俺のいる場所は湖から教会の前へと変わっていた。宣言通り影はおらず、空は赤々と燃えていた。

戦争。

この戦争で俺は自分の過去の死を乗り越え、彼女を助け出さなければならぬ。

俺はすぐに走り出した。二日目俺が殺された場所。そこに彼女も居るはずだ。

「ノエル………」

今この時、俺は真実この時代に生きていた俺になっていた。しかし……。

「い……いない？ そんな……」

確かにここは悪夢で俺が殺された場所だ。だがここには誰も居なかった。

「なんで………」

あの影の助言はもうない。ここからは俺一人だ。正解にたどり着かなければならないが……。

「……そうか！ 嘘だ」

一日目の夢は子供たちが自殺、水に引きずり込む。しかしそれは真実ではなかった。ならば二日目も俺が死ぬ為に事実が捻じ曲げられたはず。

「……間に合え！」

俺は教会へと引き返す。街は兵に蹂躪され、死体が転がり異臭を撒き散らしている。そして燃え盛る教会が見えてくる。そこには炎のような髪をした男。それに捕まっている少女——ノエル。

「——やめろおおお！」

赤い髪の男と目が合う。その眼光は鷹のように鋭く、いきなり現れた俺を獲物としても見ていない。それはそうだ。今の俺は武器を持たない一市民。撫でられれば死ぬ存在だ。

「——！」

ああ、思い出したよ。俺はここで、逃げてと言われて逃げた。怖くて、恐ろしくて。でもそれでも駄目なんだ。俺はあの時ほど死にたいと思った事はないし、事実すぐに殺された。

もうあの後悔には戻らない。これ乗り越えなければ死ぬ。確かにそうだ。この感情を抱いたまま生きていくなど不可能だ。

「ああ、お前こいつの男か？」

男は下卑た声で嗤っている。



「どうした？ 声も出ないか？」

「ロートスだ」

「あん？」

「俺の名前だ。お前、ここで死んでくれ」

「おいおい、冗談だろ？ 武器もねえのに俺を、殺す？ 泣かせるねえ。こりゃあこの子のためにも、お前を今、目の前で苦しめて殺してやらなきゃなあ」

赤い髪の男が剣を抜く。街の人間の血を吸ったのかその剣は赤黒く、なお鋭かった。

「ほらよ！ どうしたどうした！」

「——くッ」

軽く一閃。それだけで俺の腕は切り裂かれた。下衆だろうと相手は戦場に立つ兵。俺が、ましてや素手で勝てる相手ではない。そしてそれは判っていた事。影は言った。運命を変えるのは容易ではないと。

「ははははは！ もう血まみれじゃねーかよ！ いい男が台無しだぜ？」

俺の運命はこの戦場で死ぬことだ。それを変えることはほぼ不可能に近い。

「——！！」

俺が切り裂かれるたびにノエルは泣き叫び、男は狂笑している。

ああ、このままでは俺は死ぬ。元から決まっている運命の通りに何もできずに死んでいく。

それは嫌だ。許さない。そして、最も重要なのはここが夢の中だといふこと。

ならば、奇跡を起こす事も可能だろう。

剣に勝つものは何か。何で勝てるのか。

「おいおいもう終わりか？ まあ、意外と保ったほうか」

「——グ」

アバラを剣で叩かれ、倒れる。

もう少しで手が届く。

「なあ……お前の名前は？」

「あ？ ああ、自分を殺す奴の名前くらいは知りたいってか？」

男は、俺を馬鹿にしたようにニヤニヤと笑っている。

「いいぜ、教えてやるよ。俺の名はフランボウだ」

「そうかい……じゃあな、フランボウ」

握りこんだのは礫。想像するのは銃。すなわち戦の歴史を剣から鉄の弾丸へと変えた武器を創造し、この宿敵を打ち倒す奇跡を起こす。

「あ……これ……？」

胸に空いた穴からは燃えるような赤い血。髪と同じ赤を撒き散ら



解放を誓うと同時に彼女との約束を忘れたから」

「俺が逃げなかったから、運命が変わって彼女が微笑んだ？」

「そうだ。そして、ついに」ここまで辿り着いた。長かった……連れてきてくれてありがとう」

死の自画像の向こう側。最期に訪れたのは花の咲く丘。よく教会で花を摘む時に通った丘。そこに鎖に囚われたノエルが居た。

姿はあのころのまま。目を瞑っている。

「ノエル……」

彼女は目を開ける。その目は晩年の狂ったような目ではなく、あの頃のまま。大切な時のままだった。

「ロートス……そんなになつてまで、約束を覚えててくれたの？ でも私……もう何人殺したのかわからないの」

「知ってるよ。見たから」

三日目に見た悪夢はまさしくノエルの肖像画を見て自殺した者達に他ならない。

「なんで私……こんな事になったのかわからないの……」

「そうだろう。判っていたらここに居るのは魔女だったはずだ」

そう。ここに居るのはノエル。あの優しかったノエルだ。だから……

「ノエル。君が罪の意識で囚われているなら、それは間違いだ」

「え……？」

「ノエル。君は優しい。狂つてもなお優しくったんだ。この絵は……たしかに君の呪いも入ってる。でも、これは、誰かを救う為に描かれた物だ」

——  
メモントモリ  
死を想え。

本来は死を考える事で生に感謝せよという意味。戦乱の時代。または疫病の時代。病で、怪我で、生きながらにして煉獄にいる者達があった。その者達は、彼女の絵を見て優しい死に抱かれたのだ。

「この絵が……優しくった時代があつたんだ。たとえ君の最期があんなくても、俺が保証する。君の絵で救われたものは居る」

「ロートス……」

「とうかき……俺に約束を護らせてよ。子供の口約束だから無効だなんて言わないでさ……」

俺は死の自画像の前に立つ。

「でも……私はここから動けないし……沢山人を……」

「だからさ……人にばつか優しくしないで。俺にお前を救わせてくれ」

そして見つける。魔女の術の核。絵の中の髪の毛。指が胸元をかすり、乾いた絵の具と一緒にそれが剥離する。

「これで君の呪いは終わりだ」

そしてノエルを捉えていた鎖も霧のように消えうせる。

「ああ……」

何百年あれに囚われ続けていたのか。呪いながら、殺しながら、それでも彼女は俺が愛したノエルのままだった。

「だから……今一度、あの時の約束を」

「ロートス……触れ合える喜びを教えてくださいましたあなたに。私を包んで、愛してくれたあなたに。その喜びで満たしたい。ロートスに貰った宝物で、あなたの全てを抱きしめたい。離れ離れになんか、ならない」

あの時の再現。かつて湖で交わした言葉をなぞる。

「ノエルが居て嬉しい。ノエルに逢えて嬉しい。だからノエルと一緒に居たい。この時を永遠に……」

始まりは幼い恋。親の居ないもの同士の慰めあいだったのかもしれない。でも

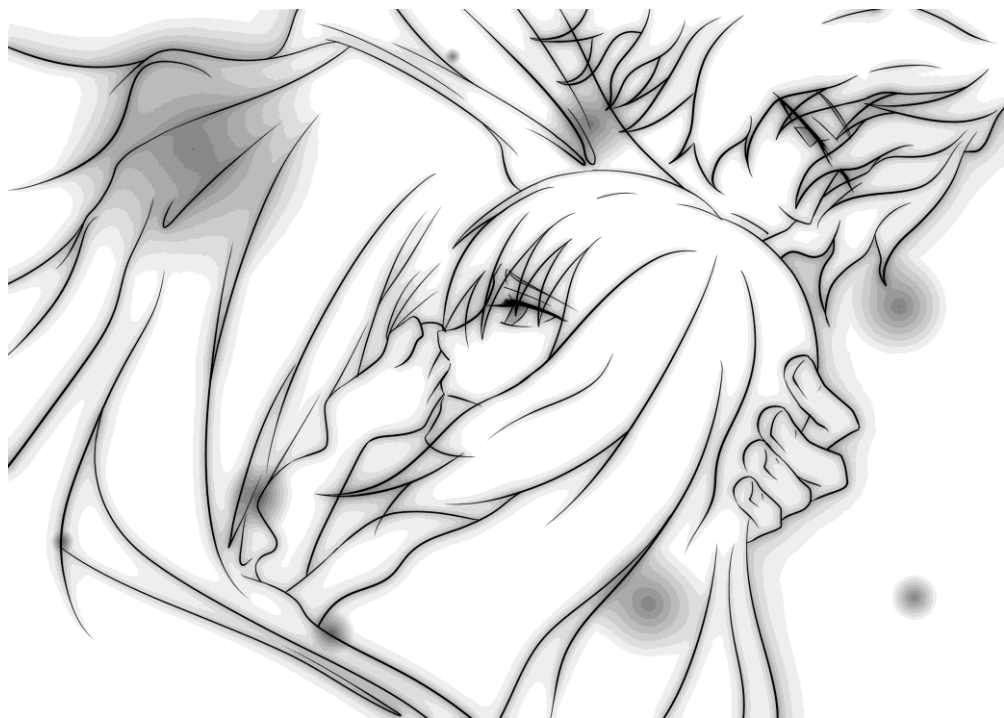
「君を愛している。それが、俺が語る物語」

「あなたを愛しく思うこの刹那、永遠なんだと信じてる。これが最期、最期のわたしの罪深さ——」

本当に愛している。あの頃には決して戻れないから、同じ約束をするのに、こころも回りくどくなってしまう。

「それでも、何があっても、ずっと一緒にいようね」

そう言いながら、俺は彼女を抱きしめた。



「ありがとう、ロートス」